MIT での一年を振り返って

法学部　北尾泰幸

1. はじめに

2011年４月より2012年３月まで、愛知大学・学外研修制度により、アメリカ・マサチューセッツ州ケンブリッジにあるマサチューセッツ工科大学 言語学・哲学学部（Massachusetts Institute of Technology, Department of Linguistics and Philosophy）でVisiting Scholar（客員研究員）として理論言語学の研究に従事した。愛知大学名古屋校舎の移転の年であるにもかかわらず、在外研究に送り出してくださった愛大の皆様、とりわけ英語教員の皆様、外国語担当教員の皆様、法学部教員の皆様にたいへん感謝している。

マサチューセッツ工科大学、通称 MIT は数理科学や工学等で有名な大学であるが、実は私が専門としている理論言語学・生成文法の研究が盛んな大学でもある。それは生成文法の創始者ノーム・チョムスキー（Noam Chomsky）がFacultyとしてMITにいるためである（現在はEmeritus（名誉教授）という肩書でFacultyの一員として加わっており、自身のオフィスで学生や研究者の質問に応じるとともに、数年に一度授業を持つことがある）。生成文法理論の研究をしている者なら、一度はMITに行きたい、できることならMITで授業を受けたいという気持ちを持っている人が多いと思うが、私も生成文法の研究を始めてからずっとその思いを抱いてきた。審査を経てVisiting ScholarとしてMITに身を置くことができ、本当に嬉しくまた充実した一年であった。今回はその一年を振り返り、印象的だったことに絞って書き記したいと思う。

2. MITのキャンパスおよび学生気質

アメリカの大学といえば、広大なキャンパスで、学生が芝生の上に寝転んで、本を読んだりおしゃべりをしたりしている様子が目に浮かぶだろう。私が大学院生時代に留学したUCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）はまさしくそのようなキャンパスであった。

実はMITはそのようなハリウッド映画に出てくるようなアメリカらしいキャンパスとは少し異なる。キャンパス自体は広いのだが、「ここからここまでが大学の敷地」と明確に区分けされているといった感じではなく、建物は比較的まとまって建てられているものの、キャンパスの中にはMITの建物ではないものもあったりする。例えばMITの最寄り駅である地下鉄Red LineのKendall Stationで降りると、駅前にはMIT Coop（大学生協）があるので、その周りの建物もすべてMITのものかと思いきや、ホテルがあったり銀行があったり、レストランがあったり…といった具合で、MITの建物ではないものも多数あり、街の中にいる雰囲気である。しばらく歩いていると、実はMITのキャンパス内を歩いているということに気付く。

MITには、煙突が出ているまるで工場のような無機質な建物がある一方で、私がいた言語学・哲学学部が入るStata Centerや建築学部の建物などは、思わずカメラのシャッターを切りたくなるような超近代的な建物である。建物が同じ色で揃えられているHarvardやUCLAのような美しさはないかもしれないが、この雑多な感じこそがMITらしさであると感じた。

Stata Centerは建築家Frank O. Gehryがデザイ

写真１　MIT Stata Center

ンした建物で、2004年に完成した。言語学・哲学学部のほかに、コンピュータサイエンス・人工知能のラボなども入っている建物であるが、1階に大教室やカフェテリア、スポーツジム、託児所などもあることから、上記の学部に限らず、学生の利用度が非常に高い建物である。学生がカフェテリアのテーブルに座り、コーヒーを片手にラップトップコンピュータを広げて勉強している。中には地べたに座り、足を伸ばしてその上にラップトップコンピュータを乗せて、キーボードをカタカタ叩いている者もいる。常にどこでもラップトップコンピュータを離さない学生の姿を見て、私自身も大いに刺激を受けた。このStata Centerの１階には掲示板があり、そこに黒板が据え付けられていて、学生がいろいろと書きなぐっている。この黒板には数式が書かれていることが多かった。学生が、授業が終わってから黒板を利用して「ああでもない、こうでもない」と議論しているのだろう。私にとってはちんぷんかんぷんで、全く何を記した数式なのか想像もつかないが、いたるところに数字の書きなぐりが見られるのは、数理科学・工学が盛んなMITらしさを象徴している気がする。

また、数式といえば、MITの学生らしい「知的な遊び」も散見された。例えばMITのTシャツのデザインにもなっている次のロゴがある。

(1) $$\frac{e}{c^2}\ \sqrt{-1}\ \frac{PV}{nR}$$

これはいったい何を表わす数式だろうか。私は「何となくかっこいい」という理由で、数式の意味をよく理解せず、この数式が書かれたTシャツを買って着ていたところ、ある時エレベーターで一緒になった女性から「この数式は何？」と尋ねられた。私は「知らない、アインシュタインか何かだと思う。」と答えたところ（非常に適当な答えである）、この女性に「知らないのに着ているの？」と言われた。確かにこの女性の言うとおりである。意味も分からず着ていて、実は変な数式ということもありうる。しかしどうやって数式の意味を確かめればよいのか分からない。そこでエンジニアの弟にメールを書いて尋ねることにした。答えは“MIT”。実はこの数式は３つの数式から成っている。一番目はアインシュタインが特殊相対性理論の帰結として発表した、質量とエネルギーの等価性を表わす関係式 $e=mc^2$ を変形したもので、答えは「m」となる。二番目は「$\sqrt{-1}$ = 虚数 i」であり、ゆえに答えは「i」。三番目は理想気体の状態方程式 $PV=nRT$ の変形で、ゆえに答えは「T」。３つ併せてMITになるというわけである。なるほど、よく考えられている。

また、MIT Coopには、“NERD PRIDE”と書かれたシールやシャツなどがよく売られていた。“nerd”というのはいわゆる「オタク」のことだが、少し揶揄して言う言い方である。例えば英英辞書で *nerd* は次のように説明されている。

(2) *Longman Dictionary of Contemporary English <5th Edition>* (Pearson Longman、2009年) [*LDOCE* [5]]

nerd *(informal)*

1. someone who seems only interested in computers and other technical things—used to show disapproval
2. someone who seems very boring and unfashionable, and is not good in social situations

(3) *Collins COBUILD Advanced Dictionary of English<Seventh Edition>*（HarperCollins、2012年）[*COBUILD* [7]]

nerd

If you say that someone is a nerd, you mean that they are stupid or ridiculous, especially because they wear unfashionable clothes or show too much interest in computers or science. [INFORMAL, OFFENSIVE, DISAPPROVAL]

つまり、コンピュータおたくで、服装には頓着しない人を揶揄して言う言い方である。確かにMITでそのような感じの学生によく会った。しかし、「それはそれでいいのだ、誇りを持て。」ということである。この数式とNERD PRIDEの2つから、MITの学生気質が何となく分かっていただけるのではないかと思っている。

さて、私がいたMIT Linguistics（MIT言語学）の学生はどんな感じだったかと言えば、基本的には数理科学・工学の学生と同じようなMITらしい学生だったと言えるだろうが、フレンドリーで話しやすい学生が多かったのは確かである。それに加えて、MIT Linguisticsの大学院生に対して私が感心したのは、「己の感覚を最大限に重視する」という姿勢で研究に臨んでいる点である。ある言語現象について分析するとき、私もそうなのだが、過去にその言語現象について述べている論文を片っ端から探し、まずはその論文を読み解いたうえで、過去の論文では説明できない点を考えることから分析を始めていく研究者が多いと思うが、MITの大学院生は、過去の論文に当たるよりも、まず先に言語データとにらめっこし、「自分の頭で」そのデータを分析しようとすることから研究を始める人が多かったように思う。自分で分析していく中で、必要ならば過去の論文を参照していくという姿勢である。よって、過去の論文に振り回されるのではなく、自分のオリジナリティが前面に出る研究となっていく。時に、重要なペーパーを見落としてしまっていることもあるが、多少粗削りであっても、自分のアイデアがしっかりと出た研究になっている。このように創造性に長けた学生の様子を目の当たりにし、私自身、研究の在り方について大いに考えさせられた。私も論文を書くときには創造性を重視し、自分のオリジナルな部分がない論文は書かないが、MITの大学院生が、研究の第一段階から「創造性」を一番に念頭に置いて研究を進めていくのには、驚かされた。現在は絶版になっているが、共同通信社の社員で社命により一年間MITに留学した方が、MITの留学生活について本を書いており（鳥井良二（2003）『はじける頭脳 MITのすごい奴ら』アートン）、この本にMITの大学院生および研究員がいかにすごいかということが記されているが、私は著者が書いているそれらのすごさは、この「創造性」とは無関係ではないだろうと感じている。

3. MIT創立150周年、MIT言語学部創設50周年

私がMITにいた年は、ある意味運が良かった年かもしれない。2011年はMITの創立150周年、そしてMIT Linguisticsの創設50周年の年であった。MIT滞在中、キャンパスのいたるところで、上のロゴを見た。この「+150」というのは、当時のMIT学長スーザン・ホックフィールド（Susan Hockfield）氏が出したコンセプトで、「これまでのMITの150年を回顧するだけではなく、それを踏まえて、これからの150年を考えていく」というものであった。最新のテクノロジーを追究しているMITらしいコンセプトだと思った。

また、2011年はMIT Linguisticsが「学部」として発足して50年の記念の年であり、12月に“Ling 50: Scientific Reunion”と題したイベントが行われた。この記念行事は単なる記念式典や同窓会といった類のものではなく、MIT LinguisticsのPh.D.取得者が一堂に会し、その中から選りすぐりの人たちが、それぞれの言語学の分野の現在の研究と将来の見通しについて話をするという、まるで学会のようなものであった。このLing 50に参加できたのは、MIT LinguisticsのPh.D.取得者と、MIT Linguisticsの関係者のみであった。嬉しいことに、我々客員研究員も参加を許された。各発表者の話はどれもスケールが大きく圧倒されたうえ、何にも増して嬉しかったのは、あのノーム・チョムスキーが講演をしたことであった。チョムスキーの口から直接、現在の生成文法に対する考えを

聞くことができたのは大きな財産である。著名な音韻論学者モリス・ハレ（Morris Halle）氏（MIT言語学・哲学学部名誉教授）から、MIT Linguisticsの発足時の苦労と、MITに対する思いを聞けたのも嬉しかった。また、このイベントで、大学院の留学時にお世話になったUCLAの先生方と再会できたのも、嬉しいことであった。MITがこのような記念すべき年であるというのはMITに行ってから知ったのだが、このような年にMITに籍を置くことができたのは、非常に幸運であった。

4. チョムスキー氏とのアポイントメント

MIT滞在中は、MITおよびハーバード大学（Harvard University）の理論言語学関係の授業に出席して、学生や教員および他の客員研究員と議論するとともに、MITやHarvardの教授とアポイントメントを取り、研究についていろいろ話をしたが、中でも一番忘れられないのは、帰国前の２月末に行ったノーム・チョムスキー氏とのアポイントメントである。

チョムスキー氏はMITやその他の大学の大学院生や言語学者とのアポイントメント、そして氏は政治の分野でも重要な提言を数多く行っていることから、政治分野の人たちとのアポイントメントで忙しく、MITの大学院生でもなかなかアポイントメントを取ることができないと言っていた。私もチョムスキー氏と研究の話をさせていただきたいと思い、アポイントメントのお願いをしようと思いつつも、「今の段階でチョムスキーに話をするなんて申し訳ない、もっと研究が進んでからでなければ…」などと変な緊張感を抱き、早くチョムスキーに会いたいと思いつつも、なかなかその一歩が踏み出せない… という、憧れの人に会うとき誰もが持つであろう感覚に陥った。しかし早くアポイントメントのお願いをしなければ、MIT滞在中にチョムスキーと話をするという夢をかなえられない。そもそも、大学院生のアポイントメントでも忙しい中、客員研究員に会っていただけるかどうかも分からない。そこで思い切って12月にチョムスキー氏にアポイントメントをお願いするメールを書いたところ、会ってくださるという返事をいただいた。チョムスキー氏から返事をいただいたときは、天にも昇る心地であった。秘書の方と日程を打ち合わせ、帰国前の２月末にチョムスキー氏と会うことになった。

チョムスキー氏とのアポイントメントは忘れられないものとなった。チョムスキー氏は初めはざっくばらんににこやかに話をしていたが、いざ私が研究の話を始めると、顔から笑顔が消え、鋭い顔になり、緊張感が走って、部屋の空気が変わるのが分かった。のっけから議論を吹っかけてくる。私が自分の理論モデルを説明している途中から、私が言いたいことが見えてきて、私が言い終わらないうちにすぐ質問や反論をしてくるのである。その質問や反論がまた鋭い。そのうえ、チョムスキー氏は自分が納得しなければ“I don't get it.”と言って、先に進んではくれない。私は緊張から背中を汗びっしょりにしながら、必死でチョムスキー氏の反論に対して、答えを用意した。しかし中にはあまりにも鋭くてすぐには答えられない質問もある。それに対しても、何とか自分なりにその場で考えたアイデアを説明した。結局30分のアポイントメントの予定が１時間になり、秘書の方が時間だと呼びに来た。研究の話をしていた時は笑顔一つ見せず、眉間にしわを寄せてとても鋭いチョムスキー氏だったが、研究の話が終わるとまた笑顔を見せ、時間がなかったため数分であったが、気軽に話をしてくださった。研究の話をしているときの様子では、とてもチョムスキー氏にサインをお願いしたり、写真を一緒に撮ってもらえたりする雰囲気ではなかったが、この笑顔を見ることができたため、チョムスキーが最初に出版した本 *Syntactic Structures* にサインをしてもらい、写真を一緒に撮ってもらった（写真では、私がそうとう緊張している様子が分かる）。このサイン入りの本と写真は、現在の私の宝物である。83歳になってもなお鋭

いチョムスキー氏の姿を目の当たりにし、生成文法の創始者であるチョムスキーのすごさを改めて実感させられた。

写真２ チョムスキー氏のオフィスで（このたび、チョムスキー氏に写真の掲載許可をいただいた）

5. まとめ

以上、一年間のMIT滞在期間に印象的であった事柄について書き記した。一年は本当に短くあっという間だった。「もう一年MITで研究したかった」というのが本音だが、もちろんそんなことは許されるわけもない。しかし冒頭に記したとおり、このような貴重な一年を過ごさせてくれた愛知大学に本当に感謝している。また、MITでお世話になった教授陣、とりわけProf. Shigeru Miyagawa, Prof. Norvin Richards, Prof. Danny Fox、そしてHarvardのProf. James C.-T. Huang、およびMITの大学院生にもたいへん感謝している。

MITがあるケンブリッジ（Cambridge）はボストン（Boston）の中心部から近く、中心部から地下鉄で行くことができる。また地下鉄でさらに２駅北へ行けば、Humanities（人文科学）の研究で有名なHarvard Universityに行くことができる。ぜひ学生諸君もボストンに行く機会があれば、ケンブリッジまで足を延ばして、MITおよびHarvardのキャンパスを訪れていただき、日本の大学とのキャンパスの雰囲気の違いを肌で感じるとともに、カフェテリアでランチでも食べながら、アメリカの大学生・大学院生の様子を垣間見ていただきたい。

明治は遠くなりにけり
－言葉の旅－
‘働くこと’と‘休むこと’の意味（補１）

経済学部　葛谷　登

1968年は明治百年の年でした。それは水俣病の原因が厚生省により発表され、東大入試の中止が決定され、プラハの春の花が咲いたかと思うと散った年でもあります（岩波書店『日本史年表増補版』320～321頁）。そして今年、2012年は明治百五十年まであと６年というところまで来ています。振り返れば、明治は益々遠い過去の世界になろうとしています。今や先進国の日本は経済競争において世界の先頭集団を走っています。最早、国内には日本が近代化を遂げたことを疑う人は少ないかも知れません。生活はコンピューターによって高度にシステム化され、一見快適然の日常を生きることが可能な世の中となりました。大量の資源と大量のエネルギーを消費して大量の財を生産した挙句、その生産物を大量に消費させられる時代になりました。資本主義社会は高度に発達し、日本の近代化は完成されたように見えます。法令順守（compliance）が強く求められる今日では、世界標準は細分化と具体化の一途を辿り、個人が主体的な判断をもって倫理的に行動する余地がどんどん狭まって行くように見えます。

日本が米国と英国並びに中国に敗れた1945年８月15日以降から池田内閣により所得倍増計画が決定された1960年12月27日以前までは様相を異にしました。圧倒的な物量の前に米国に敗北を喫したという反省から生産力をいかに発展させるか、言い換えればいかに綻びだらけの資本主義社会を繕いいかに未成熟の近代社会を完成させるかが取り組むべき課題として考えられたのではないでしょうか。

そのような問題意識を有したかと思われる一人に日本における西欧経済史研究で人間の内面